

調査と情報

編集・発行
 (株)農林中金総合研究所基礎研究部
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-8-3
 TEL. 03-3243-7331
 FAX. 03-3270-2233

日本の稲作は、大きな曲がり角に立っている。近年、国内の米の消費量が漸減し、一方で、米の生産性が向上し、作付け面積も、労働時間も少なくてすむようになり、政策的な「減反」で需給の均衡が維持されてきた。そこへ、米も、輸入の自由化の大波に巻き込まれ、流通の自由化の進む国内市場の中で、国内産米は、自らが占める位置を模索しなければならず、少なくとも量的には日本の稲作の縮小は避けられなくなった。

長年の間、稲作は、日本農業の根幹をなすものとされ、さらには日本文化の底辺を形作る、農作物の中でも特別の存在とされてきた。日本における農業は、ほぼ二千年前の弥生文化の時代に、稲作が大陸から伝わることで始まったとされ、日本農業すなわち稲作とされてきた。そこに、日本は「豊葦原の瑞穂の国」であるという表現も生まれた。また、江戸時代には、米の生産高をあらわす「石高」で地域の経済力があらわされていた。二〇世紀に入って国民の生活水準が上がると、米の消費が増え、国内生産も増加し、さらに食管制度に支えられて、米が、日本の農産物の代表になった。

しかし、日本農業は、決して稲作だけに依存してきたのではない。近年の考古学の成果によれば、弥生文化の以前には、縄文文化が豊かな花を咲かせていた。その頃の農耕が始る過程も、青森県の三内丸山遺跡では、くり栽培の跡が発見されるな

デフレ・自由化時代の

『豊葦原の瑞穂の国』

ど、多様な多彩なものがあつたことが判明してきた。穀物については、縄文時代から二〇世紀に至るまで、国内各地の風土にに応じて、米以外のさまざまな穀物の栽培が行われてきた。江戸時代でも、新田開発などによって米の増産が図られる反面、棉作などのさまざまな商品作物の栽培が拡大した。そして、幕末の開国以後は、輸出向けの養蚕が、大きく発展した。

すなわち、日本における農業の歴史を子細に見ると、その内容はすこぶる豊かで、変化に富んでいる。我々の先人達は、環境が転変する中で、それぞれの時代の需要・供給動向に応じて、適宜に作物を変更させながら、気候風土に合った農業を守り育ててきた。長い眼で見れば、今回の稲作の縮小も、そのような日本農業における作物の交代の歴史の一コマであり、そのまま日本農業の縮小に直結するわけではない。もちろん、米の場合は、その影響する範囲は広いが、棉作や養蚕と異なり、ある程度の生産は今後も確保されよう。今日のデフレ・自由化時代においては、市場メカニズムにもとづいて、需要側・供給側のそれぞれが、自由闊達に行動する。その中で、日本の農業関係者の知恵と努力を合わせれば、稲作の縮小後も、新たな日本農業発展の道を見出すことができよう。そして、その途上には、協同組合が貢献できる部分がある。

（監査役 炭本昌哉）

も
く
じ

デフレ・自由化時代の『豊葦原の瑞穂の国』…… 1
 新基本法の目指す方向と稲作の課題…………… 2
 新潟における米粉食文化振興への取り組み… 3~4
 『集落営農組織の活動実態の調査報告』について… 5~6
 佐賀県における水田農業の展開…………… 7~8

ぶっくレビュー
 『米:この貴重な食糧 世界の米生産と米貿易』… 9
 あぜみち…………… 10
 虹のかけ橋…………… 11
 統計の眼「アメリカ農業における契約の浸透」… 12
 編集後記…………… 12